

『#悪い夏』（染井為人著）を読んでみた。著者は、芸能マネージャー、舞台演劇、ミュージカルプロデューサーを経て作家デビュー。2017年、本作で第37回横溝正史ミステリ大賞優秀賞を受賞。映画『悪い夏』として実写化もされている。

医師をしていると少なからず生活保護受給者に接する機会がある。役所では生活保護受給者を認定し、その後接するのは生活福祉課である。このような患者さんから、生活福祉課の職員が定期的に訪れるのだが、それが非常にストレスであると訴えられたことがある。

本作は、生活保護受給者と関わるケースワーカーの主人公Sが、生活福祉課に異動になり、生活保護受給者に接する中で、最悪の悲劇に陥ってゆく姿を描いている。

本作のケースワーカーには、定期的に生活保護受給者のもとを回りながら、生活保護受給者の数を減らすこと（打ち切り）を上司から暗にほめかされる。あるケースワーカーが、相手の弱みに付け込んで女性に肉体関係を迫っているという情報が同僚女性Mから寄せられる。うだるような暑さのなか、真相を確かめようと女性の家を訪ねるが、その出会いをきっかけに（貧困にあえぐシングルマザーで育児放棄）普通の世界から足を踏み外してしまう。

周囲には、生活保護を不正受給する庶民、生活困窮者、問題を起こして東京を追われた地方ヤクザ（違法薬物の売人）などが出没する。彼らが絡み合って、主人公は最悪の状況に突き落とされ、凄絶な悲劇へ落ちてゆく。只々啞然とするばかりである。

日本の生活保護制度は、経済的に困窮している人々に最低限の生活を保障するための制度である。

受給者数と世帯構成：

2024年1月時点で、生活保護を受けている世帯数は約165万世帯で、前年同月比で0.4%増加している。高齢者世帯が全体の約半数を占めており、次いで障害者や傷病者世帯が多い。物価高騰や経済的な困難が続いており、生活保護の申請件数が増加傾向にある。

生活保護制度は、困窮している人々を支える重要な仕組みであるが、今後の高齢化や社会的課題に対応するための改善が求められている。

代替案として、ベーシックインカム (Basic Income) がある。これは政府が国民全員に対して無条件で一定額の現金を定期的に支給する制度である。この制度の目的は、最低限の生活を保障し、貧困を防ぐことだ。

その特徴は：

1. 無条件性：収入や資産に関係なく、すべての人に支給される。
2. 個人単位：世帯ではなく個人に対して支給される。
3. 定期的な支給：毎月など、規則的に支給される。

メリット

- 貧困の削減：生活の最低限を保障することで、貧困層を減少させる可能性がある。
- 社会保障の簡素化：現行の複雑な社会保障制度を簡素化できる可能性がある。
- 働き方の自由：経済的な安心感が増し、起業やボランティア活動など多様な選択肢が広がる。

課題

- 財源の確保：全員に支給するためには巨額の財源が必要。
- 労働意欲の低下：無条件で支給されることで、働く意欲が減少する懸念。
- 社会保障制度との調整：現行の制度との整合性を保つ必要。

本制度はフィンランドやアラスカ州などで試験的に導入された例がある。